平安京左京九条一坊跡

2024 年 7 月

株式会社　地域文化財研究所

例　言

1．本書は、京都市南区八条内田町１番の一部、１番３の一部、１番４、１番５、１番６、１番７、１番８、１番９、１番10における集合住宅建設の工事に伴い、株式会社地域文化財研究所が実施した発掘調査の報告書である。（京都市番号：23H015）

2．上記の調査は、建設予定範囲の内220㎡を対象として令和５年９月11日から11月９日まで現地調査を行った後、株式会社地域文化財研究所京都支所において整理作業を実施した。

3．現地調査は、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の検査・指導を受けた。

4．上記事業に関する発掘調査は研究所所長福永信雄、江崎周二郎、松田直子が担当し、北川翔瑛、和田健嗣が補佐した。現地作業、測量についてはやましろ文化財株式会社から協力を得た。

5．土色は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帳』に準じた。

6．標高はT.P.：東京湾平均海面高度を使用した。

7．本書掲載の遺物整理作業は江崎、阪田恭子、藤代陸が行った。

8．本書の執筆は福永の指導のもとⅠ・Ⅱ・Ⅳを江崎が、Ⅲを藤代が行った。

9．現地調査・報告書作成に際し、下記の方々にご指導、ご助言、ご協力を頂いた。記して謝意を表します。

赤松佳奈、石山淳、馬瀬智光、奥井智子、佐藤拓、谷崎仁美、西森正晃、新田和央、八軒かほり（敬称省略・五十音順）

10．本書作成にあたり、以下の文献を参考とした。

網伸也 2011『平安京造営と古代律令国家』塙書房

井上和人 1984「Ⅳ平安京条坊復原への一視点－延喜式左京職式京程について－」『奈良国立文化財研究所学報』41 奈良国立文化財研究所

小森俊寛 1985a「左京九条三坊（１）」『昭和58年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所

小森俊寛 1985b「左京九条三坊（２）」『昭和58年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所

小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年的研究－日本律令的土器様式の成立と展開、7～19世紀－』京都編集工房

日本中世土器研究会編 2022『新版　概説　中世の土器・陶磁器』真陽社

山崎信二 2000『中世瓦の研究』雄山閣

山本雅和 1997「平安京の路について」『立命館大学考古学論集Ⅰ』立命館大学

本 文 目 次

Ⅰ　はじめに・・1
Ⅱ　遺構・・・3
Ⅲ　遺物・・・10
Ⅳ　まとめ・・16

表 目 次

表１　周辺の調査一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

挿 図 目 次

図１　調査位置と周辺の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
図２　南壁・西壁土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
図３　北壁・東壁土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
図４　遺構面平面図・遺構断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
図５　粘土堆積範囲・下層確認位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
図６　壬生大路路面（SF06）出土遺物　（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
図７　壬生大路路面（SF06）出土遺物　（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
図８　その他の遺構出土遺物　（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
図９　その他の遺構出土遺物　（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
図 10　第６層出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

図 版 目 次

図版１　遺構
１．調査前風景（北西から）２．１区遺構面全景（西から）３．１区地山面全景（西から）
図版２　遺構
１．２区遺構面全景（西から）２．２区地山面全景（西から）３．壬生大路路面（SF06）（北から）
図版３　遺構
１．SD03 ～ 05（北西から）２．SK01･16、SD02（南から）３．SK01･16 土層断面（南西から）４．下層確認③西壁土層断面（東から）５．下層確認④北壁土層断面（南東から）
図版４　遺物
１．SF06 出土平瓦（１～６・50）丸瓦（７・８）２．SK01 出土平瓦（13）、SD02 出土平瓦（12･14）SD04 出土平瓦（15）SD05 出土隅瓦（16）丸瓦（10）平瓦（11）
図版５　遺物
１．SD02 出土土師器（19・53・54）瓦器（22）、SD03 出土緑釉陶器（20）SD04 出土土師器（17・52）須恵器（24・55）SD05 出土土師器（51）瓦器（21）SF06 出土土師器（９）２．SK16 出土土師器鍋３．SK16 出土寛永通宝４．第３層出土土師器（57）磁器（58）第４層出土土師器（56）第６層出土土師器（26）５．第６層出土石製品

Ⅰ はじめに

1．調査に至る経過

調査地は京都市南区八条内田町１番の一部、１番３の一部、１番４、１番５、１番６、１番７、１番８、１番９、１番10に所在する。当地における集合住宅建設に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、文化財保護課）により試掘調査（23H015）が行われた。その結果、GL-0.5～0.6mにおいて遺構が検出されたため、文化財保護法第92条に基づく調査が必要と判断され、集合住宅建設範囲の内、遺構が保護されずに破壊される部分を対象として、発掘調査の実施が指導された。調査は株式会社地域文化財研究所が実施した。

2．位置と環境（図１・表１）

調査地は東寺の西側に位置し、標高は約22.0mである。調査地西部は平安京の条坊復元における左京九条一坊五町に、東部は壬生大路路面に位置する。また調査区中央のY=-23190付近に築地心推定ラインが通る。

調査地周辺に居住されている方々によると、大正時代末期頃まで芹畑があったという話が伝わっており、また古地図や空撮写真では昭和初期から宅地化していることが確認できる。

周辺では、財団法人京都市埋蔵文化財研究所による立会・発掘調査が複数回行われている。調査地西側の四町にあたる地点では昭和56・平成10年（図１－２・７）に、北側の六町にあたる地点では平成２年（図１－６）に、南西側の九条大路にあたる地点では昭和55･60･61･63年（図１－１・３～５）に行われており、それぞれ礫面や流れ堆積、弥生時代の流路、壬生大路路面等の他、江戸時代の遺物包含層・整地層等が確認されている。

3．調査経過（図２・３）

調査範囲は文化財保護課の指導により、東西22×南北10mの調査区を設定した。また排土置き場の関係から南北に分割し、南側を１区、北側を２区とする反転調査を実施した。試掘調査結果に基づき、はじめに１区をT.P.21.5m付近まで機械掘削した結果、溝（SD03～05）や、礫や瓦を含む灰黄褐色シルト～細粒砂をベースとする壬生大路路面（SF06）を検出した。溝の以西では土器片・礫を含んだ黒褐色粘土が同様の標高で認められ、その上面で近世や時期不明のピット、土坑を検出した。

遺構の写真・図面の作成後に路面・黒褐色粘土の掘削を行った結果、Y=-23196以東では南側にのみ黒褐色粘土の堆積が認められ、その北側は黄灰色砂礫の地山を確認した。また、黒褐色粘土が堆積する箇所の下層では、灰白色粘土の地山を確認したため、それぞれの地山上面で検出を行った結果、遺構は認められなかったが灰白色粘土上面で落ち込みや凹凸が散見された他、黄灰色砂礫が調査地南西部に向かって緩やかに傾斜がつく状況を確認した。

写真・図面の作成後、地山の堆積状況を確認するためY=-23192ラインと調査区西壁沿に南北方向の下層確認用トレンチ（図３－①・②）を設けた結果、黄灰色砂礫の傾斜部分の上面に灰白色粘土が堆積している状況を確認し、それぞれの図面と写真を作成後、１区の埋戻しを行った。

続く２区においてもT.P.21.5m付近まで機械掘削し、１区と同様に壬生大路路面（SF06）と溝（SD03～05）を検出した。遺構の写真・図面の作成後に路面の掘削を行った結果、Y=-23196以東では前述の黄灰色砂礫、以西では灰白色粘土の地山をそれぞれ確認した。なお、黒褐色粘土は西壁付近でのみ薄く堆積する状況が認められたため、その上面で検出を行い土坑やピットを検出

した。遺構の写真・図面の作成後に黒褐色粘土を掘削し灰白色粘土の地山上面で検出を行ったが、１区同様遺構は認められなかった。それらの写真・図面の作成後、東端・西端の北壁沿いにそれぞれ下層確認トレンチ（図３－③・④）を設け、東端で検出された遺構（SK16）の断面や地山の確認を行い、それらの写真・図面の作成後、２区の埋戻しを行い調査を終了した。

なお、遺構検出時・完掘時等に文化財保護課による検査・指導を受け、検証審査員として滋賀県立大学教授佐藤亜聖氏の検証・指導を受けた。

表１　周辺の調査一覧

番号	調査区分	条坊の位置と概要	文献
1	立会	九条大路。 地表下 100cm ～ 120cm で礫面を検出。	京都市埋蔵文化財調査センター 1981 『調査一覧表』『京都市内遺跡試掘立会調査報告　昭和 55 年度』
2	立会	左京九条一坊四町。 地表下 70cm 以下で、流れ堆積を検出。	京都市文化観光局 1982 『調査概要一覧表』『京都市内遺跡試掘立会調査報告　昭和 56 年度』
3	立会	九条大路。 地表下 41cm 以下で、江戸時代の遺物包含層、整地土を検出。	京都市文化観光局 1987 『調査一覧表』『京都市内遺跡試掘立会調査報告　昭和 61 年度』
4	立会	九条大路。 地表下 110cm 以下は、時期不明の流れ堆積。	京都市文化観光局 1989 『調査一覧表』『京都市内遺跡試掘立会調査報告　昭和 63 年度』
5	立会	九条大路。 地表下 40cm で江戸時代の遺物包含層を検出。	京都市文化観光局 1989 『調査一覧表』『京都市内遺跡試掘立会調査報告　昭和 63 年度』
6	立会	左京九条一坊六町。 地表下 90cm で、壬生大路と考えられる路面を検出。	京都市文化観光局 1991 『調査一覧表』『京都市内遺跡試掘立会調査報告　平成２年度』
7	発掘調査	左京九条一坊四町・坊城小路。 弥生時代後期の流路、近世の耕作に伴う小溝、柵を検出。	(財) 京都市埋蔵文化財研究所 2000 『平安京左京九条一坊』『平成 10 年度京都市埋蔵文化財調査概要』
8	発掘調査	左京九条一坊五町・壬生大路。 壬生大路の路面及び西側溝の他、中近世の遺構や包含層を検出。	本書で報告

図１　調査位置と周辺の調査

Ⅱ　遺 構

1．基本層序（図２・３）

第１層	10YR3/1	黒褐色極細粒砂～細粒砂。1.5 ～ 20cm の礫含む。
第２層	5YR4/4	にぶい赤褐色極細粒砂～細粒砂。炭化物、磁器、レンガを含む（近代盛土）。
第３層	10YR3/2	黒褐色シルト。炭化物、近世の土器含む（旧耕作土）。
第４層	10YR4/4	褐色細粒砂～中粒砂に 5YR7/8 橙色シルトブロック混じる。中世の土器・瓦含む。
第５層	10YR5/2	灰黄褐色細粒砂。炭化物含む。
第６層	10YR2/3	黒褐色粘土。５～ 10cm の礫、土器・瓦含む（遺構面）。
第７層	2.5Y7/1	灰白色粘土（地山）。
第８層	2.5Y4/1	黄灰色中粒砂～粗粒砂。５～ 40cm の礫含む（地山）。
第９層	10YR5/3	にぶい黄褐色中粒砂～粗粒砂。10 ～ 15cm の礫混じる（地山）。
第 10 層	5Y6/2	灰オリーブ色細粒砂～中粒砂（地山）。
第 11 層	10YR5/3	にぶい黄褐色細粒砂～中粒砂（地山）。
第 12 層	10YR5/4	にぶい黄褐色細粒砂～中粒砂。２～３cm の礫含む（地山）。
第 13 層	10YR7/2	にぶい黄橙色細粒砂（地山）。
第 14 層	10YR7/4	にぶい黄橙色粗粒砂。５～ 15cm の礫含む（地山）。

2．遺構（図２～４）

遺構は壬生大路路面及びその西側溝の他、近世以降や時期不明の溝、土坑、ピットを検出した。調査区全体における遺構の総数は 23 基で、その内訳は道路１基、溝４条、土坑８基、ピット 10 基である。以下、遺構毎に記す。

壬生大路路面（SF06）

南北方向の道路遺構である。調査区の北端から南端まで検出した。10YR4/2 灰黄褐色シルト～細粒砂の造成土に５～ 30cm の礫や古代の瓦片が含まれている他、土師器･須恵器も少量含有する。SD02 西肩から SD03 の東肩までの幅約 4.7m の残存を確認したが、SD02 以東は中世の遺物包含層（第４層）や近世の遺構（SK01・16）があり、後世の破壊を大きく受けている。

溝（SD02 ～ 05）

SD02

南北方向の溝である。調査区の北端から南端まで検出した。断面形は皿形を呈し、北から南にわずかに傾斜する。最大幅 0.8m、深さ約 0.2 ～ 0.25m を測る。埋土は 2.5Y7/2 灰黄色細粒砂～中粒砂に 10 ～ 20cm の礫が混じる。埋土内から室町時代中期～後期の土師器皿・瓦器羽釜の他、中近世の陶器、瓦が出土した。

SD03

南北方向の溝である。調査区の北端から南端まで検出した。後述の SD05 の掘削により全容は不明である。断面は凹凸のある皿形を呈し、北から南にわずかに傾斜する。残存幅 1.6m、深さ 0.2 ～ 0.25m を測る。底の所々に凹凸が見られることや、東肩が SF06 を切るように掘削していることから、埋没の度に再掘削や拡幅が行われていたものと考えられる。埋土は、上層は３～５cm の礫を含む 10YR5/4 にぶい黄褐色粗粒砂、下層は 10YR2/1 黒色粘土ブロックを含む 10YR7/3 にぶ

い黄橙色極細粒砂～細粒砂である。埋土内から平安時代中期の緑釉陶器、平安時代後期の土師器・須恵器の他、瓦器・瓦が出土した。

SD04

南北方向の溝である。調査区の北端から南端まで検出した。後述のSD05の掘削により全容は不明である。断面は凹凸のある皿形を呈し、残存幅1.3m、深さ0.2～0.25mを測る。SD03と同様に底の所々に凹凸が見られることから、埋没の度に再掘削が行われていたものと考えられる。埋土は、上層は10YR5/3にぶい黄褐色細粒砂、中層は10YR6/3にぶい黄橙色極細粒砂～細粒砂、下層は10～20cmの礫を含む10YR6/3にぶい黄橙色中粒砂である。埋土から平安時代後期の土師器の他、須恵器・瓦器・瓦・骨片が出土した。

SD05

南北方向の溝である。調査区の北端から南端まで検出した。SD03・04の埋没後、それらの中間の位置で掘削された溝である。断面形は皿形を呈し、北から南にわずかに傾斜する。最大幅0.85m、深さ0.2～0.25mを測る。埋土は5～10cmの礫を含む10YR5/3にぶい黄褐色中粒砂である。埋土内から鎌倉時代前期～中期の土師器・瓦器・瓦が出土した。

土坑（SK01・07・12・15・16・19・20・23）

SK01

調査区東端で検出した。東壁側に延びるため全容は不明だが、平面上では北側に隣接するSK16と南北軸で連続する。埋土は10YR4/3にぶい黄褐色粘土の一部を切るように10YR3/3暗褐色中粒砂～粗粒砂が堆積する。深さ約1mを測る。埋土内から中近世の土師器、瓦、磁器が出土した。

SK07

南壁付近で検出した。南壁側に延びるため平面形は不明である。断面は台形を呈し、深さ0.35mを測る。埋土は5cm前後の礫を含む10YR6/2灰黄褐色シルトである。

SK12

調査区南西側で検出した。平面は東西0.23×南北0.49mの楕円形、断面は深さ0.1mのU字形を呈する。埋土は上層に10YR3/1黒褐色極細粒砂～細粒砂、下層に10YR5/1褐灰色粘質シルトが堆積する。埋土内から土師器・瓦が出土した。

SK15

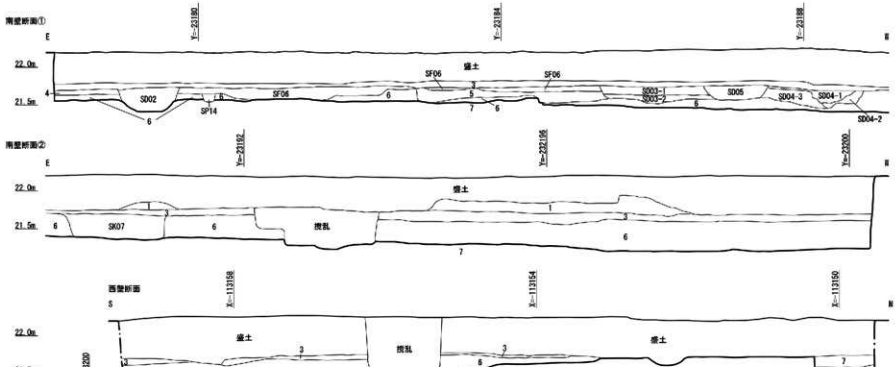
調査区北東側で検出した。現代の撹乱により一部が消失する。平面は楕円形、深さは0.2mを測る。埋土は10YR6/6明黄褐色粘土ブロックを含む10YR4/4褐色細粒砂である。

SK16

調査区東端で検出した。東壁側に延びるため全容は不明だが、平面上では南側に隣接するSK01と南北軸で連続する。北壁断面の様相から、一度埋没した後に再度掘削が行われていることが考えられる。埋土は、当初は上層に10YR4/1褐灰色細粒砂～中粒砂、下層に鉄分を含む7.5YR4/4褐色細粒砂～中粒砂と10YR4/2灰黄褐色細粒砂～中粒砂が堆積し、後に再掘削され上層に10YR5/3にぶい黄褐色シルト、下層に10YR4/2灰黄褐色シルトが堆積している。深さ約0.5mを測る。埋土内から江戸時代前期～中期の土師器鍋・信楽焼すり鉢・寛永通宝・瓦が出土した。

SK19

調査区北西側で検出した。平面は東西0.6×南北1.4mの楕円形、断面は深さ0.2mの台形を呈



第１層　10YR3/1　黒褐色砂質粘砂～細粘砂，1.5～20cmの礫含む
第３層　10YR3/2　黒褐色シルト，炭化物、近世の土器含む（旧耕作土）
第４層　10YR4/4　褐色細粘砂～中粘砂に5YR7/8橙色シルトブロック混じる。土器含む（中世の遺物包含層）
第５層　10YR5/2　灰黄褐色粘砂，炭化物含む
第６層　10YR2/3　黒褐色粘土，5～10cmの礫、土器・瓦含む（遺構面）
第７層　2.5Y7/1　灰白色粘土（地山）
第８層　2.5Y4/1　黄灰色中粘砂～粗粘砂，5～40cmの礫含む（地山）
第９層　10YR5/3　にぶい黄褐色中粘砂～粗粘砂，10～15cmの礫混じる（地山）
第10層　5Y6/2　灰オリーブ色細粘砂～中粘砂（地山）
第11層　10YR5/3　にぶい黄褐色細粘砂～中粘砂（地山）
SD02　2.5Y7/2　灰黄色細粘砂～中粘砂　10～20cmの礫含む
SD03-1　10YR5/4　にぶい黄褐色細粘砂　3～5cmの礫含む
SD03-2　10YR7/3　にぶい黄橙色粗細粘砂～細粘砂
10YR2/1黒色粘土ブロック含む
SD04-1　10YR5/3　にぶい黄褐色細粘砂　炭化物含む
SD04-2　10YR6/3　にぶい黄橙色　極細粘砂～細粘砂
SD04-3　10YR6/3　にぶい黄褐色中粘砂　10～20cmの礫含む
SD05　10YR5/3　にぶい黄褐色中粘砂　5～10cmの礫、瓦、土師器含む
SF06　10YR4/2　灰黄褐色シルト～細粘砂，5～30cmの礫、瓦含む（主生大路路面）
SK07　10YR6/2　灰黄褐色シルト　5cmの礫含む
SP14　10YR4/3　にぶい黄褐色中粘砂　5cm前後の礫含む

図２　南壁・西壁土層断面図

する。埋土は 10 ～ 20cm の礫を含む 10YR4/3 にぶい黄褐色中粒砂～粗粒砂である。

SK20

調査区北西側で検出した。平面は東西 1.4 ×南北 0.68m の楕円形、断面は深さ 0.2m の台形を呈する。埋土は上層に 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト、中層に 10YR4/2 灰黄褐色シルト～細粒砂と 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土、下層に 10YR3/3 暗褐色シルトが堆積する。

SK23

調査区北壁断面で検出した。深さ 0.1m の台形を呈する。埋土は 3 cm 大の礫を少量含む 10YR6/4 にぶい黄橙色極細粒砂である。

ピット（SP08 ～ 11・13・14・17・18・21・22）

SP08

調査区南西側で検出した。平面は東西 0.3 ×南北 0.3m の円形、断面は深さ 0.18m の U 字形を呈し、底に乳児頭大の根石が認められた。柱痕の埋土は 3 cm 大の礫を含む 10YR3/2 黒褐色シルト、掘方の埋土は 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂～中粒砂である。埋土内から陶器が出土した。

SP09

調査区南西側で検出した。平面は東西 0.33 ×南北 0.28m の隅丸方形、断面は深さ 0.22m の U 字形を呈する。柱痕の埋土は 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂～中粒砂、掘方の埋土は 10YR2/2 黒褐色粘質シルトである。埋土内から土師器・磁器・レンガが出土した。

SP10

調査区南西側で検出した。平面は東西 0.31 ×南北 0.29m の楕円形、断面は深さ 0.1m の U 字形を呈する。埋土は鉄分が沈着する 10YR3/2 黒褐色シルトである。

SP11

調査区南西側で検出した。平面は東西 0.24 ×南北 0.28m の楕円形、断面は深さ 0.15m の U 字形を呈する。埋土は上層に 10YR3/2 黒褐色シルト、下層に 10YR5/2 灰黄褐色シルト～細粒砂が堆積する。埋土内から陶器・鉄片が出土した。

SP13

調査区南西側で検出した。平面は東西 0.22 ×南北 0.24m の楕円形、断面は深さ 0.12m の U 字形を呈する。柱痕の埋土は 10YR2/1 黒色シルト、掘方の埋土は鉄分が沈着する 10YR4/1 褐灰色粘質シルトである。

SP14

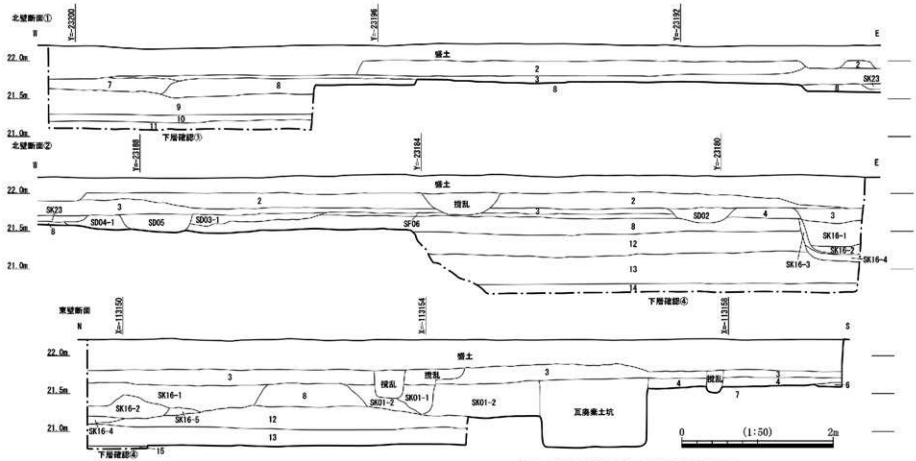
調査区南壁際で検出した。東壁側に延びるため全容は不明の楕円形である。断面は深さ 0.15m の U 字形を呈する。埋土は 5 cm 前後の礫を含む 10YR4/3 にぶい黄褐色中粒砂である。

SP17

調査区北西側で検出した。平面は東西 0.3 ×南北 0.26m の楕円形、断面は深さ 0.2m の U 字形を呈する。埋土は 1 ～ 2 cm の歴を含む 10YR5/4 にぶい黄褐色細粒砂である。

SP18

調査区北西側で検出した。平面は東西 0.3 ×南北 0.4m の楕円形、断面は深さ 0.1m の方形を呈する。埋土は 10YR8/8 黄橙色シルトブロックを含む 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土である。埋土内から鉄片が出土した。



第２層　5YR4/4　にぶい赤褐色極細粒砂～細粒砂。炭化物、瓦礫、レンガを含む（近代盛土）
第３層　10YR3/2　黒褐色シルト。炭化物、近世の土器含む（旧耕作土）
第４層　10YR4/4　褐色細粒砂～中粒砂に5YR7/8橙色シルトブロック混じる。土器含む（中世の遺物包含層）
第６層　10YR2/3　黒褐色粘土。５～10cmの礫、土器・瓦含む（遺構面）
第７層　2.5Y7/1　灰白色粘土（地山）
第８層　2.5YR4/1　黄灰色中粒砂～粗粒砂。５～40cmの礫含む（地山）
第９層　10YR5/3　にぶい黄褐色中粒砂～粗粒砂。10～15cmの礫混じる（地山）
第10層　5Y6/2　灰オリーブ色細粒砂～中粒砂（地山）
第11層　10YR5/3　にぶい黄褐色細粒砂～中粒砂（地山）
第12層　10YR5/4　にぶい黄褐色細粒砂～中粒砂。２～３cmの礫含む（地山）
第13層　10YR7/2　にぶい黄橙色細粒砂（地山）
第14層　10YR7/4　にぶい黄橙色粗粒砂。５～15cmの礫含む（地山）

SK01-1　10YR3/3　暗褐色中粒砂～粗粒砂　径５cm大の礫含む
SK01-2　10YR4/3　にぶい黄褐色粘土
SD02　2.5Y7/2　灰黄色砂～中粒砂　径10～20cmの礫含む
SD03-1　10YR7/2　にぶい黄橙色シルト～極細粒砂　径20～30cmの礫、瓦、土師器含む
SD04-1　10YR5/4　にぶい黄褐色極細粒砂～細粒砂　径５～20cmの礫、瓦含む
SD05　10YR5/3　にぶい黄褐色中粒砂　径５～10cmの礫、瓦、土師器含む
SF06　10YR4/2　灰黄褐色細粒砂～シルト。５～30cmの礫、瓦含む（玉生大路路面）
SK16-1　10YR5/3　にぶい黄褐色シルト　径10cm大の礫含む
SK16-2　10YR4/2　灰黄褐色シルト　径５～20cmの礫含む
SK16-3　10YR4/1　褐灰色細粒砂～中粒砂　径５～10cmの礫含む。鉄分沈着
SK16-4　7.5YR4/4　褐色細粒砂～中粒砂7.5YR1.7/1黒色細粒砂～中粒砂混じる。鉄分沈着
SK16-5　10YR4/2　灰黄褐色細粒砂～中粒砂
SK23　10YR6/4　にぶい黄橙色極細粒砂　径３cm大の礫少量含む

図３　北壁・東壁土層断面図

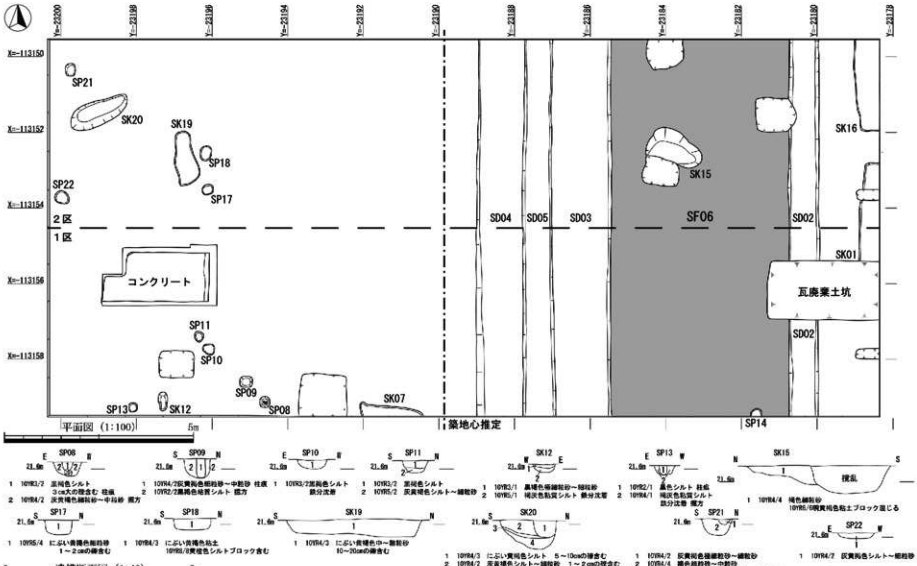


図4 遺構面平面図・遺構断面図

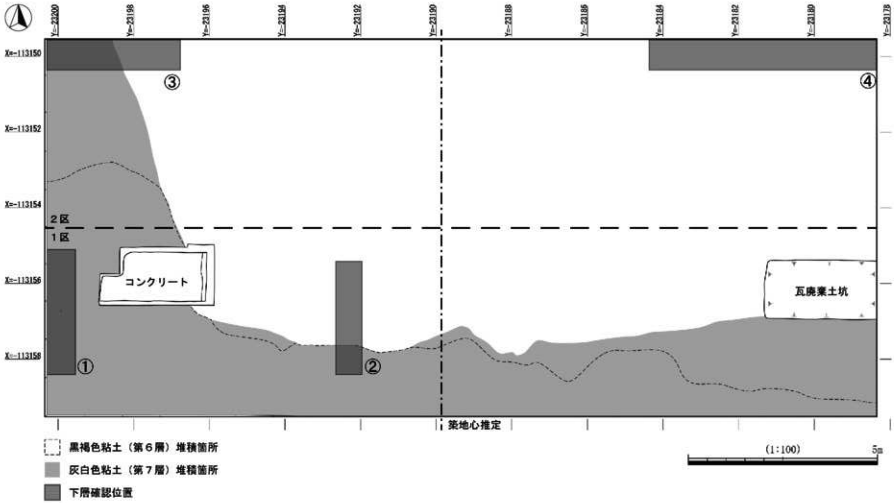


図５ 粘土堆積範囲・下層確認位置図

SP21

調査区北西側で検出した。平面は東西0.26×南北0.33mの楕円形、断面は深さ0.15mの台形を呈する。埋土は上層に10YR4/2灰黄褐色極細粒砂～細粒砂、下層に10YR5/6黄褐色粘土ブロックを含む10YR4/4褐色粗粒砂～中粒砂である。

SP22

調査区北西側で検出した。平面は東西0.38×南北0.34mの楕円形、断面は深さ0.08mの台形を呈する。埋土は10YR4/2灰黄褐色シルト～細粒砂である。

Ⅲ　遺　物

古代～近世の土師器・須恵器・瓦器・瓦・国産磁器・木杭・寛永通宝等がコンテナ３箱分出土した。主な遺物として、壬生大路路面（SF06）からは古代の土師器・須恵器・瓦が、溝（SD03～05）からは古代～中世の土師器・須恵器・瓦が、調査区東端の土坑（SK01・16）からは中世の瓦、近世の土師器鍋、寛永通宝が、第６層からは古代の土師器・須恵器・瓦が、第４層からは中世の土師器・瓦が、第３層からは近世の国産磁器が出土した。

殆どが小破片で、図化可能なものは少量であった。以下、遺構・包含層の順に記述する。

壬生大路路面出土遺物（図６・７）

路面より出土した瓦類は、平安時代に属するものと考えられる。

平瓦（１～６）　１は長さ6.6cm、幅10.2cm、厚さ2.1cmを測る。凹面には布目圧痕、コビキAが認められる。凸面は４条/cmの左斜め方向平行叩きの後に右斜め方向平行叩きを施し斜格子状に仕上げる。側面はヘラ切りを行う。胎土は径2.5mm以下の石英、クサリ礫を含む。２は長さ8.9cm、幅8.3cm、厚さ2.2cmを測る。側面及び端部はヘラ切りを行う。凹面は工具によるナデが施されるが、側面付近に布目圧痕が残存する。凸面は２条/cmの縦方向平行叩きが認められる。胎土は径１mm以下の石英、雲母、黒色砂粒を含む。３は長さ8.3cm、幅10.7cm、厚さ2.7cmを測る。側面及び端部はヘラ切りを行う。凹面は端部付近を除き布目圧痕をナデ消す。凸面は３条/cmの縦方向平行叩きが認められる。凸面は全面に、凹面は端部付近のみ灰釉を施釉する。胎土は径６mm以下の石英、長石、径１mm以下の黒色砂粒を含む。平安時代後期に属する尾張系の瓦と考えられる。４は長さ9.9cm、幅12.5cm、厚さ2.3cmを測る。側面はヘラ切りを行う。凹面は布目圧痕、幅2.0cmの模骨痕が認められるが、側面付近はナデ消される。凸面は３条/cmの縦位縄目叩きが認められる。胎土は径２mm以下の石英、長石、黒色砂粒を含む。５は長さ9.0cm、幅12.6cm、厚さ2.0cmを測る。側面及び端部はヘラ切りを行う。凹面は布目圧痕、幅2.9cmの模骨痕が認められるが、側面付近はナデ消される。凸面は５条/cmの縦位縄目叩きが認められる。胎土は径３mm以下の石英、チャートを含む。６は長さ11.5cm、幅15.4cm、厚さ3.2cmを測る。側面はヘラ切りを行う。凹面は布目圧痕、幅2.5cmの模骨痕が認められるが、全面的にナデ消される。凸面は５条/cmの縦方向平行叩きが認められる。胎土は径18mm以下のチャート、径３mm以下の石英、長石、黒色砂粒を含む。

丸瓦（７・８）　７は長さ12.7cm、幅9.8cm、厚さ3.6cmを測る。玉縁部は焼成前に凸面から凹面方向へ穿孔した釘孔が認められる。凹面は布目圧痕、ヘラケズリが認められる。凸面はナデを施す。胎土は径23mm以下の礫、径５mm以下の石英、長石、クサリ礫を含む。８は長さ12.0cm、

幅8.7cm、厚さ3.1cmを測る。側面はヘラ切りを行う。凸面はヘラケズリ後ナデを施す。凹面は吊り紐痕、布目圧痕、幅3.2cmの模骨痕が認められる。胎土は径3mm以下の石英を含む。

土師器杯　9は口径10.0cm、残存高1.3cmを測る。口縁部はヨコナデにより外反し、端部は内傾する。口縁部に煤が付着する事から、灯明器として使用されたと考えられる。胎土は径1mm以下の石英を含む。長岡京期～平安時代初期に属する。

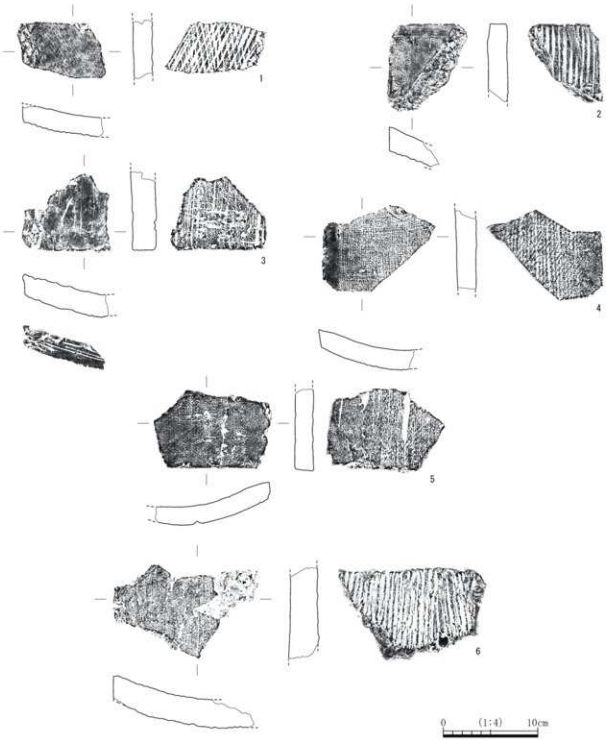


図6　壬生大路路面（SF06）出土遺物（1）

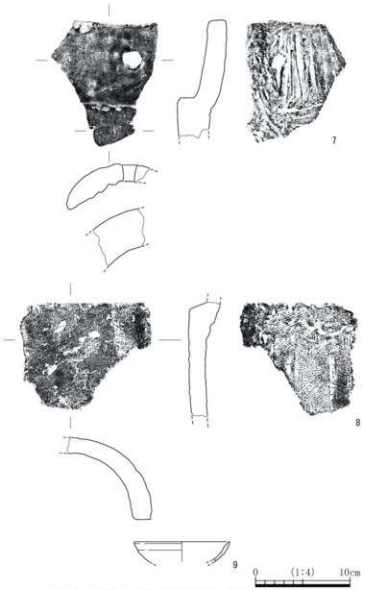


図７　壬生大路路面（SF06）出土遺物（２）

その他の遺構出土遺物（図８・９・10）

SD02（12・14・19・22）

平瓦（12・14）　12は長さ11.9cm、幅11.1cm、厚さ2.8cmを測る。端部はヘラ切りを行い、凹面は面取りを行う。凹面は工具によるナデが施されるが、布目圧痕が残存する。凸面は３条/cmの右斜め方向の平行叩きが認められるが、端部付近は左斜め方向の平行叩きを重ね、斜格子状を呈す。胎土は６mm以下のチャート、径２mm以下の石英、長石、雲母を含む。14は長さ12.0cm、幅14.8cm、厚さ2.3cmを測る。側面はヘラ切りを行う。凹面は布目圧痕、幅2.6cmの模骨痕が認められるが、側面付近はナデ消される。凸面は４条/cmの縦位縄目叩きが認められる。胎土は径７mm以下の石英、チャート、径２mm以下の石英、長石、黒色砂粒を含む。

土師器皿　19は口径15.9cm、残存高1.5cmを測る。口縁部はヨコナデが施される。胎土は径１mm以下の石英、長石、雲母を含む。室町時代後期に属する。

瓦器羽釜　22は残存高2.8cmを測る。端部に上向きの沈線を施す。口縁部が垂直気味に立ち上がる事や鍔部の位置から、京都型の室町時代後期に属するものと考えられる。

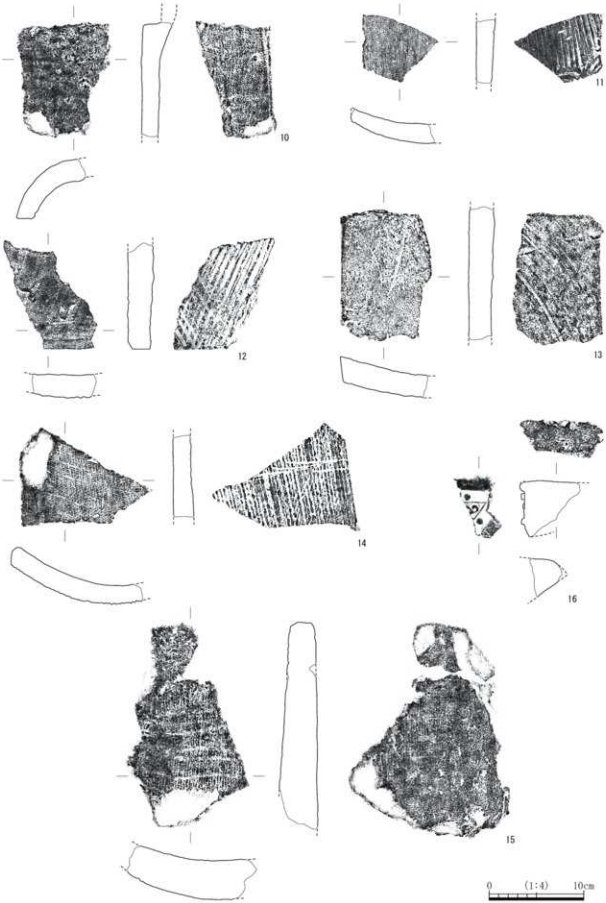


図８ その他の遺構出土遺物（１）

SD03（20）

緑釉陶器皿　20は底径6.2cm、残存高1.2cmを測る。緑釉が部分的に残存する。底部外面はヨコナデ、内面はナデが施され、削り出し円盤状高台を有する。胎土は径1mm以下の石英を含む。平安時代中期に属する。

SD04（15・17・24）

平瓦　15は長さ22.0cm、幅13.5cm、厚さ4.1cmを測る。凹面は5条/cmの横方向平行叩き、凸面も同様の横方向平行叩きが認められる。端部はヘラ切りを行う。胎土は径5mm以下の石英、長石、クサリ礫、雲母、黒色砂粒を含む。

土師器皿　17は口径7.6cm、残存高1.1cmを測る。口縁部はヨコナデにより外反する。底部は内外面ともにユビオサエ後ナデを施す。胎土は径3mm以下の石英、雲母を含む。平安時代後期に属する。

須恵器壺　24は底径8.6cm、残存器高4.9cmを測る。底面はナデ、底部は回転ケズリ後回転ナデ、体部の内外面は回転ナデを施す。胎土は径1mm以下の石英を含む。

SD05（10・11・16・21）

丸瓦　10は玉縁式で、玉縁部は欠損する。長さ12.2cm、幅8.6cm、厚さ3.2cmを測る。凸面はナデを施す。凹面は布目圧痕が残り、離れ砂が付着する。玉縁部との連結部はナデを施す。胎土は径2mm以下の石英、クサリ礫、雲母、チャートを含む。

平瓦　11は長さ7.6cm、幅9.0cm、厚さ2.0cmを測る。側面はヘラ切りを行う。凹面は布目圧痕、幅2.3cmの模骨痕が認められる。凸面は縦方向へ2条/cmの平行叩き及び同心円状叩きが認められる。胎土は径1mm以下の石英、長石、雲母を含む。

隅瓦　16は唐草文の隅瓦である。瓦当長4.0cm、瓦当幅3.5cmを測る。凹面は布目圧痕が認められるが、瓦当付近はナデ消される。瓦当裏は欠損する。凸面はヘラ切りを施す。平安時代末期～鎌倉時代初期に播磨の三本松窯で生産された、東寺修造瓦の同文瓦である。

瓦器椀　21は口径13.0cm、残存器高2.2cmを測る。口縁部はヨコナデにより内湾する。外面はユビオサエ後ナデ、内面はヘラミガキを施す。口縁部内面に施される沈線の位置から楠葉型である。鎌倉時代前期に属する。

SK01（13）

平瓦　13は長さ14.3cm、幅10.1cm、厚さ2.8cmを測る。側面はヘラ切りを行う。凹凸面とも離れ砂が付着し、凸面はコビキAが認められる。

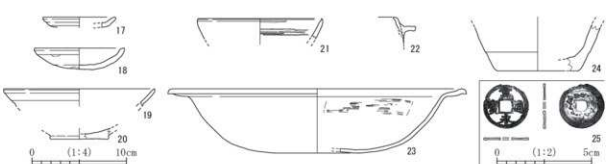


図9　その他の遺構出土遺物（2）

SK16（18・23・25）

土師器皿　18は口径9.4cm、底径3.1cm、器高2.3cmを測る。口縁部はヨコナデにより内傾する。底部外面及び内面はユビオサエ後ナデで調整するが、見込みは未調整である。胎土は径2㎜以下の石英、クサリ礫を含む。室町時代末期～江戸時代初期に属する。

土師器鍋　23は口径31.8cm、底径8.6cm、器高6.8cmを測る。口縁部は「く」字状に外側へ開き、端部は肥厚する。内面は体部を横方向のハケ後ナデ、見込みはナデにより調整する。外面は口縁部から底部にかけてユビオサエ後ナデを施す。外面は体部から底部にかけて被熱による黒変が認められ、内面の見込みに煤が付着する。胎土は径3㎜以下の石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。江戸時代前期～中期に属する。

寛永通宝　25は長さ2.35cm、幅2.38cm、厚さ0.1cm、重さ2.6gを測る。書体から江戸時代前期の古寛永である。

第6層出土遺物（26・27・28）

土師器杯　26は口径11.8cm、残存高2.0cmを測る。口縁部の立ち上がりは直線的で、口縁端部は内傾する。口縁部内面に煤が付着することから、灯明器として使用されたと考えられる。胎土は径3㎜以下の石英、クサリ礫、雲母を含む。長岡京期～平安時代初期に属する。

平瓦　27は長さ11.4cm、幅13.2cm、厚さ2.1cmを測る。端部と側面はヘラ切りを行う。側面は部分的に布目圧痕が残存する。凹面は布目圧痕、幅2.9cmの模骨痕が認められるが、側面付近は工具によりナデ消される。凸面は5条/cmの縦位縄目叩きが認められる。

石製品　28は流紋岩製の砥石、もしくは硯である。長さ6.8cm、幅4.6cm、厚さ1.8cm、重さ71.1gを測る。表面・裏面とも平滑面を有し、側面は線刻が認められる。

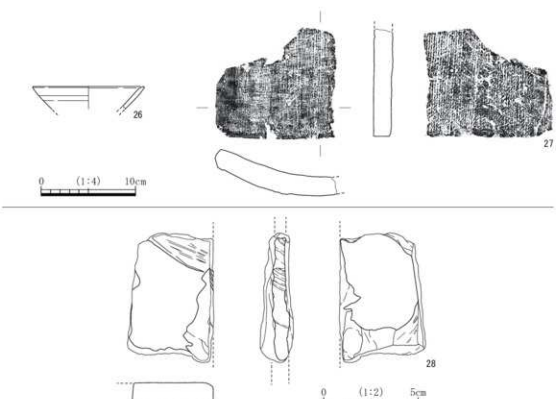


図10 第6層出土遺物

Ⅳ　まとめ

今回の発掘調査では遺構面を１面確認し、平安京の壬生大路やその西側溝を確認した。検出した遺構の総数は 23 基で、その内訳は道路１基、溝４条、土坑８基、ピット 10 基である。

（１）壬生大路

SF06 は平安時代後期の左京南東部において普遍的に見られる石を多く含む路面であり、その他瓦を含んでいる。しかし、SD02 以東は中世以降の撹乱を受けており遺存しておらず、調査区外の現在の道路下においても大きく破壊されていることが想定される。また、路面の西端は平安京条坊復元モデルよりも 0.9m 程度東にずれて検出されており、西側溝の再掘削や拡幅の影響を受けていると考えられる。

（２）西側溝

SD03 ～ 05 は、築地心推定ラインの東に位置する南北方向の重なり合った溝である。本調査では認められなかったが、『延喜式』の「京程」による規定から、築地心より３尺（約 0.9m）の範囲は築地、それより東に５尺（約 1.5m）の範囲は犬走の敷設が想定されるため、調査地では SD05 の中央付近に造営当初における西側溝の西肩があったと考えられる。この事から SD03 が元来の壬生大路西側溝であった事が想定されるが、東肩が規定よりも東に位置し、また SF06 を切って掘削している点から、路面側にも拡幅されている事が考えられる。そして埋土に乱雑に礫が含まれる点や出土遺物の時期から、最終的には平安時代後期に洪水により埋没したと考えられる。

SD04 は犬走の推定位置より掘削が行われている事から整備当初の西側溝とは考え難く、路面の維持のための SD03 の拡幅、または埋没後の再掘削と考えられる。SD03・04 の底に凹凸が散見される事や埋土の堆積状況から、複数回に渡って洪水により埋没し再掘削が行われた事が伺え、そのため溝が拡がっていったものと考えられる。埋没時期は出土遺物から平安時代後期と見られ、SD03 と同時期、或いはその時期差は小さいものと考えられる。

調査地の西側溝は「京程」の規定である４尺（1.2m）よりも幅が広く検出されている。網伸也は側溝幅が広く取られている例として、右京七条一坊の西鴻臚館から北にかけての地域において、朱雀大路西側溝の幅が７～ 10m と規定より広く、また広範囲で事例が認められる事を取り上げ「造営計画上の数値と雨水排水処理を考慮した側溝規模の実態が大きく乖離していた状況を物語っている」（網 2011）と述べている。本調査地における西側溝が規定より広く検出されている原因も、同様に規定の幅では処理しきれない雨水処理の関係で拡幅されたものと考えられる。

SD05 は SD03･04 との切り合いやその出土遺物から、それらが完全に埋没した後に掘削が行われ、その出土遺物から鎌倉時代中期に埋没したものと考えられる。調査地周辺は応安３年(1370)の『東寺百合文書』の「東寺領悪所検注取帳案」に記載される「信濃小路ト九条間壬生面」の記述から、南北朝時代には耕作地化されている事が伺えるため、耕作に伴う用水路としての利用も考えられる。しかし調査地では中世の耕作層が確認されなかった事から、現状では路面維持のための側溝の再利用の可能性も残される。

（３）調査地の地形と土地利用

調査地における地山の砂礫層（第８～ 14 層）は北から南に向かって傾斜がついており、その上面に灰白色粘土（第７層）が堆積する。築地心推定ライン以西は特にその傾斜が強く、南西側に窪んだ自然地形が形成されており、その窪みや斜面に黒褐色粘土（第６層）が堆積する（図２

～５）。この層は長岡京期～平安時代初期の土師器杯の他、瓦や小礫等を含むが、その土質は平安京の整地土として知られる「ウグイス土」とは異なることから平安京造営のための整地土とは考え難く、平安時代初期以前におきた洪水等で窪地が沼と化し、汚泥が自然堆積したものと考えられる。

築地心推定ライン以西では、内溝や居住区に関わる平安時代の遺構は認められなかったが、その原因としては、汚泥の堆積した土壌が居住地としては不向きであったため、東寺領として耕作が始まる以前の積極的な土地利用はなかった事が考えられる。一方西側溝や路面については東寺の存在により必要であったため整備されたが、本来犬走が敷設されている地点にまで西側溝の拡幅が行われたことは、居住区の利用がなく東寺側の路面の維持を優先した結果と考えられる。

壬生大路・西側溝と灌頂院（南西から）

図版1　遺構

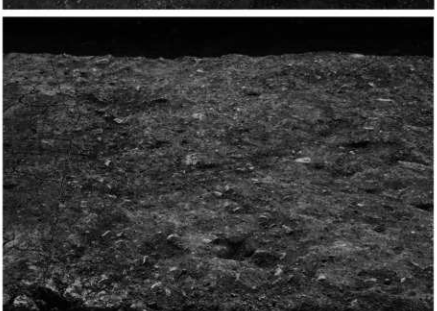
1．調査前風景
（北西から）

2．1区遺構面全景
（西から）

3．1区地山面全景
（西から）

1．2区遺構面全景
（西から）

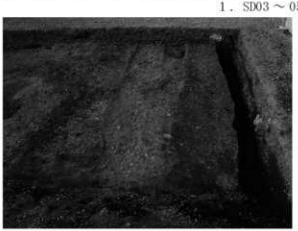
2．2区地山面全景
（西から）



3．壬生大路路面（SF06）
（北から）

図版3　遺構

1．SD03～05（北西から）

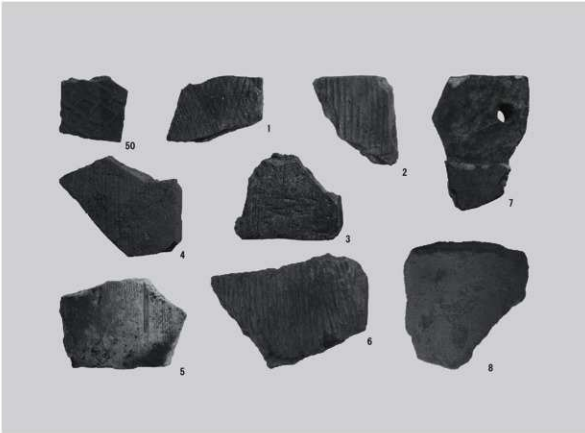


2．SK01・16、SD02（南から）

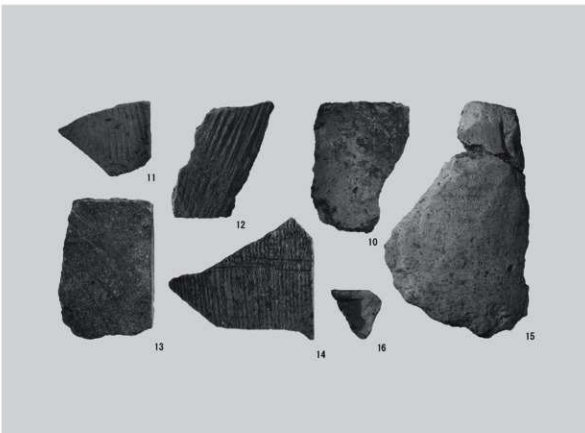
3．SK01・16 土層断面（南西から）

4．下層確認③西壁土層断面（東から）

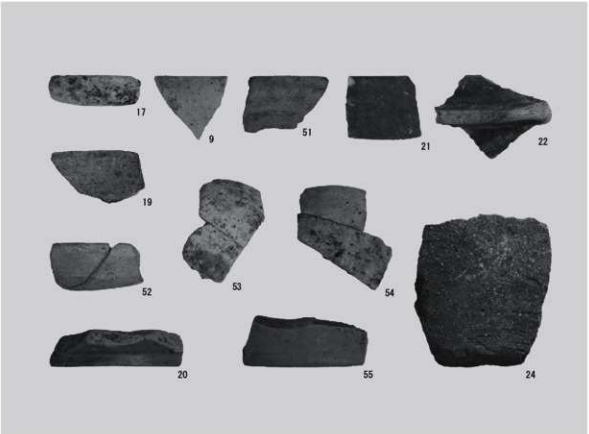
5．下層確認④北壁土層断面（南東から）



1．SF06 出土平瓦（1～6・50）丸瓦（7・8）



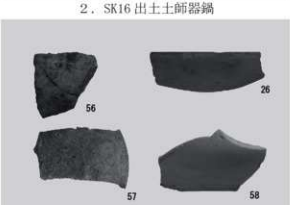
2．SK01 出土平瓦（13）SD02 出土平瓦（12・14）SD04 出土平瓦（15）
SD05 出土隅瓦（16）丸瓦（10）平瓦（11）



1．SD02 出土土師器（19・53・54）瓦器（22）、SD03 出土緑釉陶器（20）SD04 出土土師器（17・52）須恵器（24・55）SD05 出土土師器（51）瓦器（21）SF06 出土土師器（9）

2．SK16 出土土師器鍋

3．SK16 出土寛永通宝



4．第3層出土土師器（57）磁器（58）第4層出土土師器（56）第6層出土土師器（26）

5．第6層出土石製品

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうさきょうくじょういちぼうあと
書名	平安京左京九条一坊跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	江崎周二郎　藤代陸
編集機関	株式会社　地域文化財研究所
所在地	〒578‐0941　大阪府東大阪市岩田町1丁目17番9号　TEL　072‐968‐7321
発行年月日	令和6年（2024）7月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
平安京（へいあんきょう）左京九条一坊（さきょうくじょういちぼう）	京都市南区（きょうとしみなみく）八条内町（はちじょうちまち）1番（ばん）の一部（いちぶ）、1番（ばん）3の一部（いちぶ）、1番（ばん）4、1番（ばん）5、1番（ばん）6、1番（ばん）7、1番（ばん）8、1番（ばん）9、1番（ばん）10	261076	1	34度58分46秒	135度44分45秒	令和5年9月11日～令和5年11月9日	220㎡	集合住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京 左京九条一坊	都城跡	平安時代 ～ 鎌倉時代中期	路面 溝	土師器、須恵器、瓦器、緑釉陶器、瓦	平安時代の壬生大路路面と、その西側溝と見られる遺構を検出した。

平安京左京九条一坊跡

令和6年7月31日発行

編集・発行　株式会社　地域文化財研究所
〒578‐0941　東大阪市岩田町1丁目17番9号
TEL　072‐968‐7321

印刷・製本　株式会社　地域文化財研究所